

## あらし（シェイクスピア）

大嵐の中、ナポリ王アロンゾー、ミラノ大公アントーニオーらの乗る船が遭難して絶海の孤島に漂著する。島には元ミラノ大公プロスペローが愛娘ミランダと共に暮してゐた。十二年前、彼は弟アントーニオーの悪巧みとナポリ王の策謀とによつて大公の座を追はれたのだが、嵐は、その復讐を遂げるべく、學問を究めたプロスペローが「怒りの魔法」の力によつて惹起したものだつた。

船が漂著すると、プロスペローはナポリ王子ファデーナンドを王の一行から切離して、獨り渚を彷徨ふ裡にミランダと出會ふやうに仕向ける。若い二人は忽ち戀に落ちるが、王子は愛の眞實を證すべく、何千本もの丸太を運び積上げるといふ苛酷な試練を課せられる。一方、ナポリ王の一行だが、王子が溺死したと思込んだアントーニオーは王の弟セバステイアンを、唆し、王を殺して王位を篡奪せんと謀るが、凶行の寸前、プロスペローの操る妖精に沮まれる。

亦、島に棲む怪物キャリバンはプロスペローから恩義を被つたにも拘らず、ミランダを陵

辱<sup>じよく</sup>しようとして失敗して以来、厳しい折檻<sup>せつかん</sup>を受けるのを恨んでプロスペローへの憎惡<sup>づ</sup>を募<sup>も</sup>らせ、密かにその殺害を謀るが、これ亦妖精に沮まれる。

やがてプロスペローは試練に耐へた王子を祝福してミランダとの結婚を許す一方、ナポリ王の一行に魔法をかけて幻影を見せ、ナポリ王、セバステイアン、アントーニオーの罪を暴いて厳しい神罰を豫告<sup>よこぐ</sup>する。王は前非を悔い、他の二人は錯亂状態となる。けれども、結局、「大事なのは道を行ふ事であつて、怨みを霽<sup>はら</sup>す事ではない」と信じたプロスペローは、「怒りの魔法」を投棄<sup>ていせき</sup>して王と和解し、他の二人の惡黨<sup>あくどう</sup>も赦<sup>ゆる</sup>してやる。王は若い二人の結婚を祝福して目出度く幕は下りる。

「あらし」はシェイクスピア最後の作品であり、和解と赦<sup>ゆる</sup>しとによつて締括<sup>しめく</sup>られる一方、ドランの云ふやうに、そこには「この世のあるが儘の姿」が赤裸々に描かれてゐるのだが、それは如何に矛盾に満ちた姿である事か。父親しか人間を知らなかつたミランダが王達の一行を見て、「ああ、素晴らしい、新しい世界が目の前に、かういふ人達が棲<sup>すま</sup>んでゐるのね、そこには！」と叫ぶと、プロスペローが「寂しい笑ひを浮べながら」、「お前にはすべてが新しい」と呟く。この件りについてメルヴィルは、「ミランダがこの臺詞をどんな人間に關して語つてゐる

るか考へてみよ——それからプロスペローの密やかな評言を——何と恐しい！」と書いてゐる。ミランダには野心故に兄を裏切り王の殺害をも謀るアントーニオの悪魔性も人間の恐べき眞實だといふ事が分らない。しかし、プロスペロー即ちシェイクスピアはそれを知抜いた上で、若い二人の「愛情の麗しき出會ひ」を祝福する。純愛の美しさに打たれるのも人間の眞實だからだ。

一方、あの「生れながらの悪魔」の「曲つた根性、躰<sup>しじ</sup>けではどうにもならぬ」とプロスペローが匙<sup>き</sup>を投げる醜惡な怪物キャリバンが實に美しい臺詞を口にする。「時には歌聲が混じる、それを聽いてゐると、長いことぐつすり眠つた後でも、またぞろ眠くなつて來る——さうして夢を見る。雲が二つに割れて、そこから寶物<sup>たから</sup>がどつさり落ちて來さうな氣になつて、そこで夢が醒めてしまひ、もう一度夢が見たくて泣いた事もあつたつけ」。

人間は天使と悪魔との間で引裂かれた矛盾の塊なのであり、メルヴィルはシェイクスピアから「人間に關する究極的な知識」を學んで、それを知つたからには「さしたる驚愕に襲はれる事はありません」と書いた。さういふ眞の人間知を如何にして吾物と成すか、吾々日本人にとつてそれ以上の大事は無いとさへ私は思ふ。